『学校』一九五七年三月（新日本教育協会）
《講座・戦後世界の教育》

ヨーロッパの歴史教科書における アジア文化の取扱い

矢口　新

はしがき

ここにあげる資料は、昨年五月パリーのユネスコで開かれた国際会議の際に各国から提出された報告書の概要にもとづいている。実は昨年五月、著者はパリーのユネスコでヨーロッパの教科書における「アジア文化の取扱いに関する専門家会議」という長い名前の会議に出席した、その際の資料をもとにしてヨーロッパ諸国における歴史教科書のアジア文化の取扱いについて述べてみたい。

ヨーロッパ諸国の歴史教科書におけるアジア諸国の文化についての叙述は、予想外に少ない。少ないばかりでなく、誤解もあれば偏見もあるのである。われわれ日本人の初等中等教育における諸外国の歴史の取扱いはそれに比べると雲泥の差である。われわれは歴史とはそういうものだと常識でいるので、ヨーロッパの事情をみると驚くほかない。最近国際理解などということが盛に主張されているが、それはアメリカやヨーロッパからの輸入であって、われわれは、ヨーロッパやアメリカでは、もっと理想的な国際理解の教育がおこなわれているように考えるのである。ところが、ことアジアに関する限り、これから述べるような状態であって、義理にもすぐれた国際理解の教育をしているとはいえない。

ヨーロッパ各国の間では、国際理解をしているのであろうか。ことアジアに関する限りは、国際理解といっても、多少ニュアンスが異なるのである。五月の時の会議でも、そのことが明らかにみとめられたが、つまり、これまでヨーロッパはアジアに全然目を向けていなかった。ところが、最近アジアは変貌をとげた。それにもかかわらず、従来通りのアジア観をもっていたのでは、ヨーロッパ人のイマジネーションがなくなる。この際何とかしなくてはならないというような考えかたである。きわめて実利的なものである。

この会議が開催される前に、各国のユネスコ国内委員会は、それぞれ専門家に依頼して自国の歴史、地理、その他社会科の教科書をこの見地から分析して、ユネスコ本部に報告した。これにもとづいて、国際会議は、教科書の改善、あるいは歴史、地理、社会教育についての国際理解の立場からの改善を相談したわけであるが、次にそれらの報告書にもとづいて、各国の歴史教科書の実情を述べる。紙数の関係もあるのでフランス、イギリス、イタリアなどの主な国にとどめておく。

一　フランス

フランスでは、初等、中等教育の一二年間の教育の上の七年間のいわゆる中等教育の段階のところで、どのようにアジア文化を取扱っているかを詳細に報告している。それに

よると、中等教育の七年間に、第1表のように歴史の教育を二回まわりおこなっている。

第一ラウンドが下の四年間、第二ラウンドが上の三年間、第二ラウンドでは、主として、近世以後の歴史をやっている。この二回まわりの間に、アジアの文化についてどれだけ教えているかというと、第2表を見られたい。

第1表
フランス中等教育における歴史の教育

最　終	現　代
1	革命時代
2	十七・八世紀
3	現　　代
4	近　　代
5	中　　世
6	古代世界

(注) フランスでは、上から第一、第二とよぶ。

これでみると、つまり東洋の文化については、古代世界のエジプト、メソポタミアなど、それからアレクサンダーの東方遠征に関して、ペルシャなどが語られ、ついでサラセンの文化、マルコポーロの遠征に関して、シナの文化が語られ、近世で、イギリス、フランスの植民地獲得に関係してインドのことが語られ、現代で、ヨーロッパの影響のもとに、インド、シナがどのように変化したかをみているだけである。

第2表　フランスの歴史教育で取扱われるアジア文化

時代(学年)	近東文化	回教文化	インド文化	極東文化
古　代 (6)	エジプト・メソポタミア・フェニキア・ヘブライの文明			
同　上	ペルシャ・ヘレニズム文化・ローマ文化の中の東洋文明			
中　世 (5)		七世紀から九世紀にいたる回教文化		十三世紀におけるシナ文化。マルコポーロに関係して
近　世 (4,2)			十七，八世紀におけるインドの文化。ヨーロッパの侵略に関係して	
現　代 (3,1,最終)			イギリスの支配下におけるインドの変貌	ヨーロッパの影響下における極東文化の変貌

これは、東洋というものの文化をみていることにはならない。文明とか文化とかは、西洋のものであって、ヨーロッパの世界が確立してゆく途中で、未開の諸国をみてゆくといった取扱いかたなのである。フランスには、ヨーロッパ史やフランス史はあっても、われわれ日本人がもっているような世界史観はないのである。これがきわめて時代おくれであることはだれにもわかることであろう。すでに世界の東洋と西洋とが一つになっていろいろと問題をおこしているのであって、もはや新しい目で見られなくてはならない時である。いわゆる二つの世界というのは、そういう一つの世界史の中の出来事ではないか。

ニ　イギリス

イギリスの教科書分析の委員会は、全部で一四七冊の教科書を調べて、その教科書の中のアジアの取扱いを批評している。この中で世界史の教科書といわれるものは一五で、あとはヨーロッパ史かイギリス史である。この教科書について批評をしている。その評価は、どんな範囲のことを取扱っているか、重味はどういうところにかかっているか、全体として統一がとられているか、視野は広く向けら

れているか、公正であるか、客観的であるか、などという視点をおいてなされ、全体としてみた教科書の傾向を述べている。それらの中から主な点を紹介してみよう。

まず古代のアジアを取扱った部分であっても、中東は別として、ヨーロッパの文明の背景としての意味しかもたせていない。近代でも同様に、ヨーロッパ的世界のことしか取扱っていない。つまりアジアという考えかたがないのである。またヨーロッパ文化の根源にあるものは、中東や地中海文化であって、広いアジア文化というものを考えていない。

アジアについて取扱っていることは、もの珍らしいといったことが多く、その社会の事情を理解させるようなことが少ない。つまりアジアは同じ人間の社会として考えられているより、珍奇なもの、好奇心の対象として考えられている。

インドのことについても、イギリスの侵略以後の政治に関連して取扱われており、インド文化に関して述べられているのでない。

また次のようにも批評されている。インドやシナの文化が発達した古代のことはしばしば除外されている。近代のことを扱ってもアジア自体の発展の見地から取扱っていない。したがって二十世紀のアジアの発達などはきわめて粗雑である。重点がおかれているのは、ペルシャのダリウスとか、アレクサンダーの遠征とか、マルコ・ポーロやその後の東洋旅行者のことといったことである。もっとも多少よい教科書になれば、仏陀とかアソカ王、孔子といった人びとにふれているが、ある教科書では、シナは長い間固定した宗教や文化の世界に住んでいて、やっとクリスト教を受け入れるようになったと書いて、ジンギスカンの時代にいきなりはいっている。

また重要な問題が忘れられて、たいして重要でないことが特に強調されている。たとえばヒンズーのカースト制度や迷信的習慣と思われることが強調されるが、それを説明する社会的、経済的、文化的な事情は全然ないといったこと。また一八五七年のベンガルの土民の暴動についてイギリスに不利なことは述べていない。つまり教科書は、伝統的に植民地獲得、ヨーロッパの帝国主義のふんい気をもっているといってよいのではないか。

またある著者は、中世のシナやインドはおとぎの国のように豊かな国だと書いたりして、つまり全体として統一がない。ある部分はかなり正確に述べているかと思うとあるほどアジアへは行かなかったと述べ、ヨーロッパの文化がアジアへはいった時、アジア人にはそれらは受け入れられなかったと書いている。

これはシナやインドはイギリスやヨーロッパの商業や領土拡張などに関してだけあげられているといった基本的な考えかたとも関係する。そしてそこからまた客観性という点でもあまり好ましからざる結果を生み出してくる。たとえば、パーマーストンのシナにたいする政策はしばしば批判されるが、その同じ著者が、インドについて、「イギリスのインド支配時代の光栄ある物語」などと書いているのである。一般にシナについての方がインドについてより、より客観的な叙述をしているといえようが、これはインドが植民地であったということが大きく関係しているのであろう。

三　イタリア

次にイタリアの教科書について紹介しよう。イタリアでも、ユネスコ国内委員会の報告は次のような趣旨のことを述べている。

どうしても正当な理由を発見できない大きな穴が多くの教科書に見られる。たとえば、インドの歴史はイギリスの植民地化の歴史

でしかないこと。シナの歴史が一八九五年の下関条約以降からはじまること、つまりシナの歴史が日本との比較でぞんざいに扱われていることなどである。

　またヨーロッパ的見地という点が目立つことである。アジアは、ヨーロッパ諸国民の活躍の舞台でしかないという取扱いかたをされている。中世から近世へかけての歴史は、コーロッパの歴史の中で取扱われる。「地理上の発見」とか「植民地帝国の勃興」といった取扱いである。つまりヨーロッパ人がそれまで知らなかったアジアを発見したという考えであり、植民地を開拓していったということである。アジアは全く無視されている。そしてアジア人自身の判断というのはほとんどない。しかしたまには、日本の岡倉天心が、ヨーロッパはアジアにとって危険があるといったということを述べているのもある。

　また先入観念や人種的偏見を著者がもっているとは必ずしもいわないが、アジア諸国について述べられる意見が、いつもきまり文句であるということは否定できない。たとえば、インドについて、「華麗と貧困の対照」「ぼう大な人口、貧困、諸侯による搾取」「壮大なモニュメント、ぼう大な貧民の群との対照」といった表現、シナについて、「保守と惰性の国」「停滞した文化」「千五百年前の農具を今日も使用する農民、同様な衣裳をつけている人びと」「シナにおいては古いものはすべて神聖であり、新しいものはすべて悪魔の所産と考えられる」といった表現。日本について、「深い精神的統一を保持しながら、日本は二〇年たらずの間に、みずからを変貌させた」「そして経済的、軍事的、社会的にすぐれた近代国家となってヨーロッパの諸国と競争し得るに至った」「先生を追い越した生徒」等等といった表現。これらはいかにもきまり文句であって、皮相な感がするのである。

　アジアの人物については、ほとんどが征服者であって、詩人、文学者、哲学者などについてはほとんど無知である。たとえばインドでは、仏陀、アクバル、テイプ、サーヒブ、チラク、ガンデイなど、シナでは、孔子、老子、孫文など、日本では信長、秀吉、家康、明治天皇、東郷元帥などである。

　最後に教科書のアジアにたいする誤解について述べると、第一にアジアの人びとをヨーロッパの規準に合わせて判断すること、つまりアジアの民族をヨーロッパの知識や技術への適応という点だけでみること、ヨーロッパの影響を受け入れたかどうかで価値を判断すること、ヨーロッパ型の政治形態を取り入れたか否かで文明国か否かを判断することは大きな考えちがいである。またヨーロッパの侵入は恩恵であるときめてかかっている。そしてアジア人に排外思想をあおっている。

結　語

　ヨーロッパ人にとっては、われわれのいう世界史はないであろう。考えてみれば当然のことかも知れないが、それは彼等の将来の不幸を意味するものではないか。それだからこそ、教科書の改善に躍起になっているのであろうが、伝統あるその教育や教科書が、そう一気にかわるものではない。ユネスコ会議に集まったヨーロッパの教育者たちは、深刻になやんでいた。あの顔を私は忘れられない。

（国立教育研究所員）